

コミュニケーションにおけるコンテキストへの依存度の日英比較

A Japanese-English Comparison of Contextual Dependence in Communication

柏木 真緒

Mao Kashiwagi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：人間，文化，言語，コンテキスト，コミュニケーション

Key words：Human, Culture, Language, Contextual, Communication

1. 研究目的

Hall (1976) は *Beyond Culture* の中で世界の文化をロー・コンテキスト型とハイ・コンテキスト型に分類した。しかし、昨今の研究によると、一言でハイ・コンテキスト表現といっても様々なレベルのものが存在することが分かってきた。同一の会話内にコンテキストがあるなど比較的容易に理解できるものもあれば、伏線のように同一の会話内にはない細かな背景情報まで適切に把握しなければ理解できないハイ・コンテキスト表現もある。すなわち、日本語話者と英語話者のハイ・コンテキスト表現には、ハイ・コンテキスト表現とコンテキストまでの距離、およびコンテキストに依存する度合いに違いがあるのではないかという仮説を立てることができる。また、発話者と受け手の関係性がハイ・コンテキスト表現に与える影響もあると考えられる。これまでハイ・コンテキストについて実証的に検証されたものは見当たらない。Cardon, P. W (2008) は Hall のハイ・コンテキスト文化とロー・コンテキスト文化の理論を踏まえ、コンテクスティングの研究者のために以下の提言をしている。

Develop measures or instruments for contexting. Because existing research does not reveal any reliable basis for comparing cultures in terms of contexting, future research must employ rigorously developed measures. Such measures would allow a basis for effectively contrasting cultures and would allow for replication and extension studies.

つまり、前述したコンテキストに依存する度合い等を測る尺度など、ハイ・コンテキスト表現を適切に分析することで、コンテキスト依存の研究を

進展させるための基盤となる方法を立ち上げたい。それにより、ハイ・コンテキスト表現を構成する多次的な要素を明らかにし、再現性のある研究方法の構築を目指す。また、本研究では豊富な言語資料を収集し、それを分析することでより現実のコミュニケーションスタイルを反映した結果を導き出したいと考えている。

2. 研究実施内容

映画のエンディングにはハイコンテキスト・コミュニケーションが描かれることが多い。そのため、今回のテーマは「映画のエンディングに用いられるハイ・コンテキスト」とした。

そして、さらに恋愛映画でエンディングにハイコンテキスト・コミュニケーションが用いられている作品を分析対象と定めた。恋愛映画は他の映画ジャンルと比較すると主題に一貫性があり、人間同士のコミュニケーションを作品の軸としている特徴がある。さらに、関係が発展した主要な登場人物のコミュニケーションでエンディングを迎える傾向がある。これらのことから恋愛映画のエンディングはこの研究における分析対象として適している。

また、先行研究として、映画のエンディングを研究テーマとしている Neupert (1995) の内容整理に取り組んだ。

3. Neupert (1995)について

Neupert (1995) は、映画のエンディングに焦点を当てた学術的な研究を行った。彼は、映画はどのように物語のエンディングを示すか、そしてエンディングは観客の解釈や感情にどのように作用す

るかを考察した。彼は、登場人物の行動や編集技法によって、言葉を介さずに物語の意味を伝える方法を探った。Neupert は、以下の6つの点から映画のエンディングは単なる物語の結論ではなく、視覚的・感情的な解決と深い意味を伝えると主張した。

(1)エンディングの概念

物語のエンディングは、観客に物語が完結したという感覚を与えるための重要な要素であり、これにはストーリーの論理的な結末だけでなく、情緒的・テーマ的な結末も含まれる。完全に閉じたエンディング（閉幕感が強いもの）と、あえて未解決のままにするオープンなエンディングの違いについても議論されている。

(2)語りの視点とエンディング

映画のエンディングにおける語りの技法と視点の役割についても深く掘り下げている。例えば、特定のキャラクターの視点で語られる物語がどのようにエンディングに影響を与え、その視点の変化が観客の情緒的反応にどのように影響するかが分析された。

(3)ジャンルとエンディング

映画のジャンルごとにエンディングのあり方は異なる。ロマンチック・コメディ、スリラー、ドキュメンタリーといった異なるジャンルは、それぞれ異なる形式のエンディングを求めることが多い。また、それが観客の期待にどのように応えるかについても論じられた。

(4)クラシカルなハリウッド映画とモダニズム

クラシカルなハリウッド映画におけるハッピーエンドや明確なエンディングの伝統を分析し、一方モダニズムやニューウェーブ映画における非伝統的な、時にはオープンエンドや曖昧なエンディングの傾向についても論じられている。特に、20世紀後半以降の映画が、観客に意図的に解釈の余地を残す傾向にあることに注目している。そのような映画は、観客に明示的な解決を与えずに曖昧さを意図的に残すエンディングを採用することが多くなり、これにより観客は自己解釈を行う必要が生じた。このようなエンディングは、観客に考えさせ、感情に深く訴えかける効果を狙っている。このようなエンディングは見終わった後も観客の心に残って、議論や再考を促すため強い情緒的あるいは知的なインパクトを与える。

(5)文化的背景とエンディングの違い

文化的な違いがエンディングの作り方にどう影響するかに言及している。例えば、ハリウッド映画とヨーロッパ映画、そしてアジア映画のエンディングについて、各文化が物語の結末にどのような期待を持っているかを分析している。

(6)エンディングの構造

映画のエンディングは物語の他の部分と同様に非常に重要であり、特に最後のシーンが観客に与える情緒的な余韻や、物語全体のテーマを補強する役割について詳細に探求している。

Neupert は、エンディングには文化的な背景が大きな影響を与えるとして、ハリウッド映画、ヨーロッパ映画、アジア映画におけるエンディングの特徴を次のようにまとめている。

(1)ハリウッド映画

伝統的なハッピーエンドが多く、観客に明確な解決や感情的な満足感を提供することを重視している。典型的なハリウッド映画は物語の結末で全てが解決され、主人公が幸福や成功を手に入れるという形式が好まれる傾向がある。これは、観客にカタルシスを与えるためのものである。

(2)ヨーロッパ映画

オープン・エンディングや哲学的な問いを残すエンディングが多い。しばしば物語の解決よりも、登場人物の内面やテーマの深さに焦点を当てる。観客に答えを提供するのではなく、むしろ問いを残すような形式が好まれる。このようなアプローチは、観客が映画を見終わった後に物語やテーマについて考え続けることを促すことが目的である。

(3)アジア映画

文化的・精神的な解決や、時には暗黙の了解を用いたエンディングが多い。特に日本や中国の映画ではハイ・コンテクストな文化的背景が強調され、登場人物の行動や態度に深い意味が込められている。物語の結末が明示されない場合が多く、観客は登場人物の表情や行動から物語の真意を読み取ることが期待される。このようなエンディングは、観客が自分の文化的知識や感性を用いて物語を補完することを求めている。例えば、日本映画『誰も知らない』では、物語が淡々と進んで最終的に何の解決も得られないまま終わるが、その中に深い人間関係や社会的テーマが含まれており、観客は自ら解釈する必要がある。Neupert は、これらの違いは文化的な期待や物語の構築方法に深く根ざしていることを強調している。

4. まとめと今後の課題

最後に、この研究に取り組むにあたって軸としたいのは「ミクロ視点でみるハイ・コンテクスト」である。わたしはホールによるハイ・コンテクストや、ロー・コンテクストの説を真っ向から否定したいわけではない。確かに、彼の説は社会的な大きなマクロの視点で見れば理にかなっていると言える。日本という国は単一民族国家とまでは言い切れなくとも、シルクロードの末端に位置していた島国であり、和歌をたしなみ、物事の機微に気が付けることが雅とされた貴族文化があったことなどを踏まえると確かにハイ・コンテクスト文化を持つ社会である。また、アメリカのように移民によって築かれて発展してきた社会はロー・コンテクスト文化を持つ社会であると言えるだろう。ただ、一個人のコミュニケーションというミクロの視点で見れば、ハイ・コンテクストを理解することによって、コミュニティにおけるメンバーシップを獲得することや、人との繋がりを実感する喜びを得る、というものは普遍的なものなのではないだろうか。このミクロ視点の明示により、これまでのハイ・コンテクスト文化と、ロー・コンテクスト文化という二極化した単純な見方に反論することを本研究の目標として定めたい。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成 (B) (DB2408)「コミュニケーションにおけるコンテクストへの依存度の日英比較」を受けたものです。